

自己評価報告書

平成23年 4月20日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2012

課題番号：20320068

研究課題名（和文） 生成語彙意味論に基づく語彙情報と事象構造の融合的研究

研究課題名（英文） Toward an Integration of Lexical Information and Event Structure Based on the Generative Lexicon Theory

研究代表者

小野 尚之（ONO NAOPYUKI）

東北大学・大学院国際文化研究科・教授

研究者番号：50214185

研究分野：英語学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：語彙・意味

1. 研究計画の概要

本研究は、語彙意味論モデルと構文研究を基に語彙情報と事象構造の融合に関する日英語の比較対照研究を行うものである。中心課題は次の3つに集約される。

(1) 生成語彙意味論によるレキシコン研究の推進。生成語彙意味論モデルのクオリア（語彙情報）が事象構造の解釈をどのように決定するかという問題の解決を目指す。

(2) 言語における主観性（subjectivity）問題の解明。主観性が事象構造の解釈（例えば、心理状態述語など）にどのように影響するか。そして、構文選択にどのように影響するか。

(3) 語彙化・文法化における語彙情報と構文の融合についての新たな提案。語彙情報が構文に融合しさらに文法化していく過程には、類型論的に捉えるべき普遍性があることを示す。

2. 研究の進捗状況

本研究は、平成20年度～22年度までの3年間、当初の研究計画に即して順調に進めている。初年度の平成20年度には、研究代表者を中心として研究分担者がそれぞれのテーマに関して理論的な基盤を固めるため、研究会を開催し進捗状況を報告した。平成21年度末には研究成果を広く公開するためのワークショップを東北大学で開催（2010年2月）、小野、堀江、上原が研究成果を発表し、ナロックがそれぞれの発表にコメントした。平成22年度は研究テーマを継続的に発展さ

せて研究に取り組んだ。

本研究プロジェクトでは、これまで特に研究の国際化に力を入れたことを強調しておきたい。研究代表者である小野は、韓国（高麗大学）、ベルギー（ゲント大学）、タイ（チュラロンコン大学）、英国（オクスフォード大学）などで開催された国際学会で研究成果を発表した。また、22年度には、アリゾナ大学（米国）から研究者を招き、研究課題に関連したワークショップを開催した。このように、国際的な研究交流活動を活発に行い、国際的なレベルでの研究成果の発信を進めた。

この3年間に、研究代表者および分担者は、合計で18件の論文を学術雑誌等に発表、また、国内の代表的な学会および国際的な学会において17件の口頭発表を行った。さらに小野は単著（編）で論文集を出版し、堀江とナロックはそれぞれ共著で著書を出版した。研究期間中に、研究成果を著書の出版という形で社会へ還元することを行った。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

先に述べた進捗状況を踏まえ、本研究プロジェクトは当初の計画に即して進行しており、おおむね順調に進展していると判断する。

4. 今後の研究の推進方策

現在までのところ、研究計画に特段の変更の必要性は認められないので、今後も予定通りに進めていくつもりである。これまで実現した研究成果を踏まえ、さらに研究の国際化を図るべく国際的なジャーナルや学会等で

の成果発表を推し進める。

5. 代表的な研究成果

[雑誌論文] (計 18 件)

1. 上原聡、「名詞化と名詞性—その意味と形—」、『日本語学』(特集「名詞句の文法」)、Vol. 29-11、24-38 頁、査読あり、2010 年
2. Nakamoto, Takeshi、Inalienable possession constructions in French、*Lingua*、120、pp. 74-102、査読あり、2010 年
3. Narrog, Heiko、Voice and non-canonical marking in the expression of event-oriented modality – a cross-linguistic study、*Linguistic Typology*、14/1、pp.71-126、査読あり、2010 年
4. 小野尚之、日本語連体修飾への語彙意味論的アプローチ、由本陽子・岸本秀樹編『語彙の意味と文法』、くろしお出版、査読あり、pp. 253-272、2009 年
5. Horie, Kaoru、Grammaticalization of Nominalizers in Japanese and its Theoretical Implications: A Contrastive Study with Korean、Lopez-Couso, M.J. & E. Seoane (eds.), *Rethinking Grammaticalization: New Perspective for the Twenty-first Century*, John Benjamins、査読あり、pp.169-187、2008 年

[学会発表] (計 17 件)

1. 小野尚之、英語結果構文の固有性と類型的特性、日本英語学会、日本大学、2010 年 11 月 13 日
2. Ono, Naoyuki、Two modes of argument selection in nominals、20th Japanese/Korean Linguistics

Conference、Oxford University、Oxford、U.K.、2010 年 10 月 1 日

3. 小野尚之、「項構造と事象性」、日本英文学会シンポジウム、東京大学、2009 年 5 月 31 日
4. 上原聡、「頻度が形作る活用形態の(不)規則性—用法基盤モデルの観点から」、日本言語学会第 137 回大会 公開シンポジウム「言語変化のモデル」、金沢大学、2008 年 11 月 30 日
5. Narrog, Heiko、Asymmetry between positive and negative speech-act modality and the semantic map of the imperative-hortative area、The 18th International Congress of Linguists、Korea University、Seoul、Korea、2008 年 7 月 26 日

[図書] (計 3 件)

1. Heine, Bernd and Narrog, Heiko. *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*, Oxford University Press. 1048 ページ. 2010 年
2. 小野尚之 『結果構文のタイポロジー』 ひつじ書房 487 ページ 2009 年
3. 堀江薫・パルデシ・プラシヤント 『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ』 研究社 281 ページ 2009 年